

永井龍男全集

第十卷

永井龍男
全集
十

講談社

雜文集Ⅱ

永井龍男全集 第十卷

昭和五十七年一月二十日 第一刷発行

著 者 永井龍男

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽三―二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

振替 東京八―三九三〇

定 価 四二〇〇円

装 幀 原 弘

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tatsuo Nagai 1982, Printed in Japan



ISBN4-06-119290-6

(文1)

目次

わが切抜帖より

水晶……………11

銭湯……………16

春めく……………20

野球開幕……………24

身上相談……………28

少年……………32

銀座の着物・巴里のベレ……………36

ある随筆の筆者……………40

キリンの死……………44

月を往復する距離……………48

祝儀不祝儀……………52

月の表面……………	56
カンディダの話……………	60
デンキ屋問答……………	64
犬と猫……………	69
耳と鼻と……………	73
億という数字……………	77
銀座の水溜り……………	81
歯医者 of 庭……………	85
蓮ひらく……………	89
「死ぬほど良心に」……………	93
下足札……………	97
五右衛門について……………	102

フオークと箸と……………106

ビルとネズミ……………110

昔の東京 一

ステッキと文士……………117

わが寄席行燈……………120

二昔三昔……………135

ライスカレーとカツレツ……………152

大震災の中の一人……………159

武道館界限……………164

昔の東京 二

魚河岸春夏秋冬……………171

回想の芥川・直木賞

第一章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

201

第二章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

237

第三章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

300

第四章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

341

芥川賞の生まれるまで 対談・佐佐木茂索Ⅱ 永井龍男

388

芥川賞直木賞受賞作・予選通過作品一覧

399

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

417

解題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

423

永井龍男全集

第十卷

わが切抜帖より

水晶

「これは面白いな」

と、思った新聞記事や、たまには雑誌記事を、昔から私は、切抜いて置く習慣があった。

これは面白いという意味は、はじめは小説になるかも知れぬということが第一だった。

だから、その切抜きは、私には関心があっても、他の人達にとっては一向面白くないものかも知れなかった。

新聞記事を切抜くのは、私に限らず、いろいろな人のすること、吹聴するまでもない。昔は「切抜通信」というようなものがあった位で（いまもあるかも知れない）、必要な分野の注文を出すと、たとえば経済とか文芸とか、演芸という風に指定すれば、日本全国の新聞にのった同種類の記事の切抜きを、まとめて送ってよこす商売もあった。

しかし、私の切抜きは、そのうち少しずつ変わって行った。私だけの関心を惹いた記事ばかりではなくて、感動した文章や記事にも及んで行った。

他日一冊の本になって、世に出るような筆者のものは、その日の新聞で読み捨てても再読の機会はあるが、もしかすると、それ切りになる文章があるかも知れない。

世の中は忙しくなるばかりだから、新聞記事などはなおさらのことである。昨日の大事件すら、一月経て

ばほとぼりはさめてしまう。市井に起こった小事件などは、一日か二日で忘れられる道理である。

「こんな見事な、文章があるんですよ」

「面白いと思うんですがね、どうでしょうこの記事は」

そんなつもりで、私はこれから、新しいものや古いものや、短い文章、数行の記事を取り出して、私なりの感想を記して行きたいと思っていた。

切抜きを、人に見せてしまうのは、ずいぶん惜しい気もしないではない。だが、なるほどと同感してもらうことが出来れば、それも一つ大きな喜びである。

それに、仕事に追われたりすると、折角保存して置いた新聞や切抜きを、見えなくしてしまう失敗も度々ある。こんな形で活字にしておけば、私の習慣ももう少し身につくようになるかと思う。

前置きは、短かい方がよい。

とにかく第一回に入る。

数年前、秋から冬までをニューヨークで送ったことがある。

前から「クリスマスは私の家で」と、マサチューセッツ州のM家から招ばれていたもので、十二月二十四日の朝、ニューヨークをたった。汽車がマサチューセッツにはいると、あたりの森の木々のあいだには数日前の雪が残っていて、どここの一角をとってみても「泰西名画」といいたい風景。

目的のガードナー市の駅には、M老夫妻が冷たい午後の風のなかを待っていてくれた。夫人の買い物ものこりがあるというので、二、三軒のお店により、それから、三十分ほど森をぬってドライブして、いよいよ、かれらの住むカエデとニレの木におおわれたいな町につく。秋来た時とうって変って木々は葉をおとし、ある町角には、小屋が出来ていて、その中にキリスト誕生の光景をあらわした人形がかざられてあった。

「ほら、クレシダ」といって、ミラー氏は、そのまえで車を徐行させて見せてくれた。

どこの家のドアにも、ヒイラギの環がかかり、窓のなかにはクリスマス・ツリーがかざられているのが見える。

さて、M家につくと、さっそく、クリスマスの支度の手つだいかかった。ツリーは前日、親類の子どもたちが来てかざってくれた。私の仕事は、階段の手すりを森から切ってきたみどりの枝でくるむことである。ほそいひもで、できるだけ葉っぱが手すりからはえていようなかっとうにつつんだ。これがすむと、M夫人がみんなを呼んで「見てごらんよ。いままでこんなに上手にやっただけ人は、ひとりもなかった」とびっくりする。家のなかには、森のなかを歩いているようなにおいがしはじめた。

七十八と七十四の仲よし夫婦は、ともに仕事をもっていたから、家には家政婦がいて、この人が台所でM夫人の指図によって、M家につたわるプディングなどをつくっていた。

クリスマス・イブには、家の者だけ——M夫妻・家政婦とその息子のジョニー、それに私だけの静かな食事だった。

つぎの朝早く、ミラーおじいちゃんと教会に出かけた。このおまわりは、かれが信心ぶかったり、私がクリスチャンであつたためではなく、日本からきた私に、アメリカのいなか町のクリスマス風景を見物させるためであつた。しかし、冷気のなかにひびきわたる鐘の音であつまり、うたつて、いのつて、また散つてゆくこの礼拝は、すがすがしいものだった。

帰ると食卓の準備ができていた。M氏のオイ二人とその家族が、つぎつぎに到着して、子どもたち六人は、すぐ食堂のテーブルで、酒気なしの食事をはじめる。おとなたちのために、きょうは、客間にできたテーブルのまわりで、しばらくは、さしつさされつのにぎやかなやりとりがあつた。やがて、M氏がテーブルの上座についてごちそうのサラをまわしはじめる。肉は七面鳥ではなく、大きなハムに香料の丁子の棒をさした丸焼きだった。

テーブルのまん中にある、シンチュウでできた天使のついたローソクたてに火がついても、いっこうに天

使がまわらない。

ほんとうは天使がまわって、チリンチリン鐘をならすのだと、M氏が説明してくれた。まわり灯ろうの要領だなと思ったので、私がちよつと熱い空気のあたるところをひねったら、たちまち天使はまわり、鐘がなりだした。みんながわつと声をあげたのに、M氏は「どうして鐘がならないんだ？」と、きょとんとしている。一座はしんとなり、私はぎょつとした。前年まで聞こえた鐘が、M氏には聞こえなくなっていたのである。

しかし、すぐまた座はにぎやかさをとりもどし、食後は、おとな、子どもそろつてのゲームがはじまった。若い人たちは、老人夫婦を十分たのしませ、おくり物をもらうと、七時すぎにはさつと切りあげていった。そのあとの静かで、おだやかで、さびしかったこと。

これは、ちょうど昨年のいまごろ、東京新聞の文芸欄にのつた、石井桃子さんの「ニュー・イングランドのクリスマス」という随筆である。

季節にふさわしいので、この試みの第一回を飾りたく、石井さんをお願いして、掲載をゆるしていただいた。石井さんは、加筆した上でと云われたが、時間がないので無理におゆるしを得た。

私はアメリカを知らない。

マサチューセッツ州が、どんな風土の処で、ガードナー市がどんな町であるか、またニューヨークから何時間で行けるのかも、かいかも見当はつかない。

石井さんが加筆されたのは、そんな省略の部分にもあると思われるが、それが却って「楓と楡の木につつまれた」老夫妻の家を、クリスマスの灯を、くつきりと私に感じさせてくれる。

これはそのまま、水晶のような透明度と結晶をもった一幕物である。

この見事な文章に、余計な讃辞や説明を加えることは、読み終えた人の感銘をそこなうことになるだろう。